

三つ子の魂（下）



外山 滋比古

離乳語—その一—

赤ちゃんには母乳を与える。しかし、いつまでもおっぱいをやっていると、発育によくない。母乳というのは一見何でもないようなものですが、総合栄養が入っています。病気に対する免疫まで入っているということです。そういうすばらしい母乳でも、あまり長く与えておきますと、発育に必要なものが不足してまいります。そこで離乳をやります。どんな呑気なお母さんでも、離乳をいつするかということを考えないお母さんはいないと思います。しかし、お母さん言葉をいつ離乳させるかということに関して関心をもっているお母さんはほとんどありません。大体母乳語などを考えているお母さんがいないのですから、離乳語など考えないというのは当然かもしれません。

この母乳語から離乳語へ移る、移り方というところが、子どもの知的発達最初の関門であります。ここをうまく越せませんと、総領であれば甚六になりますし、次男であっても甚八ぐらいになつてしまうのです。それではどうしたらいいかと申しますと、二つありまして、一つは子どもと母親の関係を少し遠ざける、かわいい子どもと徐々に距離をとっていくという、移行が大切なのであります。

母乳語だけで育っている赤ん坊は、しばしば母親以外にも同じような人間が存在するという実感をもたないで生きている場合があります。その場合に、他の人とのコミュニケーションをなるべく多くする。よく、赤ん坊は人見知りをして泣きます。するとお母さんは「私じゃなきゃだめなのよ。よその人だとすぐ泣くわね」と、それを助長して得意になっている。そういうことをして

いると、よその人の言葉がよくわからない、よその人の言葉に耳を傾けないような子どもになってしまいます。それで、ある年齢がきたらなるべく他の人たちにふれさせる。兄弟がたくさんありますと、この離乳語がごく自然に行くのであります。子どもの世界が広くなります。一人っ子が扱いにくいというのは、この離乳語が十分できていないためにおこるのです。一人っ子でも離乳語がきちんとしておれば、一人っ子の持っている我儘な、自己中心的な社会性の欠如ということがおこらなくてすむわけです。

急に母子関係を切りますと、子どもはノイローゼ症状をおこします。典型的な例は、上の子がまだ離乳語の前後の時に下に子どもが生まれるという時、これでお母さんたちが失敗している例がたくさんあります。昨日まで子どもと母乳語を交していたお母さんが、ある時突如として「あなたはお父さんのところへいっていらっしやい」といって、生まれた子どもに夢中になります。すると上の子は、お母さんは裏切ったと思わないで、小さいあの子がお母さんをとったと思います。その赤ん坊を敵視してはじめます。するとお母さんはムキになって、「何ですか、あなたはこの間までいい子だったのに、急に悪くなっちゃったわね。本当にいけない子！」などといえますから、上の子は救われないわけです。

母乳語から離乳語への切替えがあまり唐突ですと、こういうふうになり子どもはショックを受けます。小さな子どもですから辛うじて持ちこたえています。もし大人だったら自殺する人がある位のショックでありましょう。よく兄弟喧嘩が一ぺん大人になってからおこると、なかなかおらないというようなことを言いますが、いま申したことと関係があると思います。したがって、年子などという場合は、非常に早くから気をつけて離乳語にきりかえるということをしなければいけません。

離乳語というのは、社会性を言葉によってつけるということですよ。よその人を見ても泣かない。友だちができても勝手なことをいわないで仲よく遊べるような言葉です。幼稚園へ入る前には少なくともそういう教育をしておかないと、幼稚園の生活が楽しくない。

離乳語—その二、おとぎ話

もう一つの離乳語があります。この離乳語は、人間の能力、才能というものを決定する、俗にいう頭のいい子どもになるか、頭のよくない子どもになるかの境目であります。頭のいい悪いというのは生まれつきだとわれわれ思っておりますが、そんなことはありませんで、大部分はこの離乳語が適切に教育されるかどうか

によってきまるのであります。

まず母乳語はこういう特色を持っています。目に見えるもの、さわることのできるものしか母乳語は教えることができません。どんな赤ん坊でも「親切」という言葉を覚えられるわけがありません。しかし本当にあるものだけしか使えなかつたら、人間の言葉は非常につまらない。人間の言葉が人間の文化をこしらえ、人間が動物とは違った知性、知恵というものを持つのは、目に見えないもの、さわることのできないもの、この世にないもの、そういうものを言葉で現わし、その言葉を理解する力があるからです。ところが母乳語ではそういう教育ができない。離乳語で抽象的な言葉を教えなければいけないのです。本当のことに対してうそを教えなければならぬ。皆さんは子どもにうそを教えるなんて、とおっしゃるかもしれませんが、うそを教えなければ子どもはよくならない。昔の人はうそを教えるのにうまいことを考えておりました。何かというと「おとぎ話」です。おとぎ話はみんなうそです。

「桃から赤ちゃんが生まれました」そんなことを誰が信じますか。本当にそうだと信じる子はいないと思います。おとぎ話はくりかえし、くりかえして慣用をつくり上げます。そしてやがて、子どもはおとぎ話を本当には起こらないが「おはなし」というも

のがあるらしいということがだんだんわかってくる。これは理屈でなしに、感覚としてわかるのです。このおとぎ話がわかると、人間の言語の入口が開かれたことになります。人間の言葉の特色は、こういう、うそが言えるということです。

いずれにしても、おとぎ話をもっともつと真剣に子どもに教えないければいけません。くり返し、くり返して……。しかし絵本はいけません。絵本でおとぎ話を教えますと、うその世界、抽象の世界へ入ることが遅れます。したがって、絵入りの絵本でおとぎ話を教えないこと、大人が本を読んでおとぎ話を教えないこと、口でそらんじている話を何回もくり返すことです。子どもにとつては、一にも二にもくり返しが必要なのです。おとぎ話が離乳語として非常に大事なものは、物語というものの基本形を教えてくれるからであります。大人になってから小説をおもしろく読めるか読めないかということも、このおとぎ話の基本がしっかりしているかないかで決まります。

抽象性と教学

国語の方の基礎を作るのが物語性として見たおとぎ話なら、離乳語としてのおとぎ話のもう一つの特徴は、抽象性を子どもに教えることができることでもあります。現実には存在しないものに理解

をしめし、言葉を書号として使うわけです。これがうまくいきま
すと、ゆくゆく数学がよくできるようになるはずであります。今
まで、おとぎ話は国語科の基本であるということを行っている人
はありますが、おとぎ話が数学的なものの基本となるということ
を言わないのは、おとぎ話というものをよく考えていない、言葉
というものをよく考えていないからであって、おとぎ話をキチン
と教えれば、抽象的な言葉の使い方、したがって数学というもの
も理解しやすくなるはずであります。ただし子どもにおとぎ話を
教えるのが主として女性であるために、そして女性は大体物語性
が好きであるために、どうもおとぎ話と国語を結びつけてしま
うことが多いのであります。しかし、現代において、数学的、論理
的な思考というものが非常に重要であるということは多くの人が
認めている通りであります。頭のいい子どもを育てたいと思っ
ているお母さんは、算数がよくできるようになればいいと思っ
てはまずです。それには、おとぎ話を絵本など見せないで、くり返
しくり返しきかせればいいのです。

小学校一年生に入って算数の文章体の問題が出てきます。「太
郎くんが鉛筆を三本、次郎くんが二本持っています。太郎くんと
次郎くんの鉛筆を合わせると何本になりますか」というような文
章があると、この抽象性が十分ついていない子どもは「太郎くん

という友だちはこのクラスにはいないね」と言います。また「鉛
筆って、トンボと三菱とどっち？」「ほくの鉛筆、みんなけずっ
てあるけど、太郎くんのはけずってあるの？」こういうことを言
う子どもは、抽象性が不十分であります。したがってこれは、算
数以前に言葉を理解する能力が欠けています。これでは算数をや
っても能率が上がりません。この場合、太郎くんというのは桃太
郎の太郎と同じである。どこにもいないが、しかし、いること
にすることができぬ。

幼稚園では、おとぎ話を、抽象性に結びつけて理解させる方向
に努力をすれば、知的教育の効果があります。現実には幼稚園
は、進学に非常に神経質なお母さん方をたくさんかかえていると
思いますが、そのお母さんたちに「大丈夫です。頭をよくしてあ
げます。算数ができるようになりますよ」と言えば、お母さんは
ポーツとなって何も言わなくなるだろうと思えます。心理学でピ
グマリオン効果ということを言います。はじめはできなくても
「できたねー」と言って試験をくり返すうちにだんだんできるよ
うになるのです。お母さんたちにも「頭がよくなりますよ」とい
っておけば、ある程度は本当に頭がよくなるのです。

三つ子の魂の仕上げ

私は、今の教育の中で「三つ子の魂」というものをかりに考えたとすれば、大学はもちろん無力であります。高等学校も、中学校もだめ、小学校も一年生ぐらいの時によほどいい先生がいれば、ヒョットとして三つ子の魂が少し変わるかもしれません。しかし幼稚園はかなり多くの場合、三つ子の魂というものの最後の仕上げができるのであります。三つ子の魂というと、人格的なことだけ考える方がいらっしゃるかもしれませんが、国語ができるようになり、数学に対する能力をもち、頭のいい人間というものの基本です。それは要するに母親と幼稚園の先生の協力によって、殊に幼児教育者によって行なわれます。もちろん、頭がよくなるだけでは困るのであって、人間の感覚、美しいものと美しくないもの、していいことといけないうこと、というようなことに関して、基本を身につけるのが、三つ子の魂で、それができるのは幼稚園までの時代だと思えます。

私はいまの教育の形をひっくり返して、ピラミッドのように一番最初が一番大事で、徐々に上へ行けばせばまって行くことが当然だと思っております。そういうことから考えますと、教育の基本というものを幼稚園よりも少し下へさげなければいけません。

ん。しかし急にさげてもお母さんたちは教育ができない、先生が教育をするには子どもを歩かせて通わなければならぬ、この二つの理由で、幼稚園以前の教育ができないのですが、もし先生の方が子どもの方へ出向いて行くようになれば、教育は生まれたその瞬間からできるようになるはずです。将来日本人がもっと教育に関心をもつようになれば、どうしても一対一の教育、生まれた時から教育ということになるであります。少数の、三つ子の魂を作り得るお母さんは、ご自身で育てになればよろしい。しかし多くのお母さんは、子どもを甚六にする危険をもちます。その場合は、この人がそばについて下されば立派な三つ子の魂ができる、というような教育者がいれば、非常にすぐれた教育の仕事がそこできるとなります。

昔は代理母親ということをしていました。たとえば大名の子どもがもし甚六になりますと、その藩はつぶれてしまう危険があります。それで家臣の中から賢母のはまれ高い女性を選んで乳母にして、この人に子どもの養育を任せました。いわば最幼時における個人教育をしたわけです。お母さんがある程度しつかりして、子どもの教育をしようという意欲と能力を持っている場合はいいが、そういうことができないようなお母さんが一種のセンチメンタリズムで、わが子は自分で育てるなどというのは、子どもにとって

よくないことであると思います。もっと謙虚になって、場合によっては、あえて人に育ててもらおうというようなこともあっていいと思います。それがいやならば、もっとお母さんは真剣に、子どもを育てることはいかなることであるか、勉強をする、本を読むのではなく一生懸命に考える必要があると思います。しかしこれは理想であって、現状では幼稚園において三つ子の魂の仕上げをしていただきたいというのであります。

それについて一つ二つ蛇足的なことを次に申し上げます。

耳から聞くということ

このごろ聞くところによりますと、いい幼稚園というのは字をたくさん教える幼稚園だといっているお母さんたちがいて、そのお母さんたちのごきげんをとり結ぶようなことをやっている幼稚園もあるということです。子どもに文字を教えるということは、幼稚園などではやってはいけないことの一つであります。幼稚園でやることはそんなことではないはずですが、言葉に関して申し上げますと、「耳から聞く言葉の訓練」ということこそ、幼稚園はやっていただきたい。これがたいへん難しいのです。皆さんが子どもを集めて何か話をされるといたします。三十人の子どもたちに分間話をして、子どもが静かに聞いている幼稚園は、おそらく日

本に一つもないだろうと思います。まあせいぜい一分か一分半くらいしか聞いていないだろうと思います。これはいけないのです。少なくとも十分間位人の話を聞く訓練をしていただきたい。おもしろくなくても聞くのです。そんな無茶なおっしゃるかも知れません。初めはもちろんおもしろい話でなければだめですが、その内に、先生が話をされたら、どんなに退屈でも黙って聞いているという訓練ができていなければ、文字などいくら教えてみても、プラスにならないと思います。なぜ私がこういうことを言うかといいますと、日本人の最大の欠陥は、耳がバカになっているということであります。すべて目を通してやります。したがって目で読んだことを理解する能力は、恐らく世界でも最高水準にあると思います。しかし、天、二物を与えず、耳で聞く方はとんとだめであります。外国へ留学された方、外国へ行かれた方は身に覚えがあると思いますが、外国へ行って一番困るのは、本を読むことではなくて、聞くことです。講義を聞く、日本の大学ですとちょっと難しい字は黒板へ書いたりします。書かないことは本に書いてある、あとで見ればわかる、と思っております。ヨーロッパの大学へ行って講義を聞かれると、すると、教師はペラペラとしゃべって大事なことも二度いわない。長い数字も黒板へ書いてくれないのです。アメリカの映画なんかをご覧になると、そ

一つの電話番号は？”といいますと“三八八の九九三三五二だ”なんていいますと“あ、そうか”と言ってかけますね。われわれだと“あ、ちょっと待って”と言ってメモをとります。覚えていられないわけです。要するに耳で覚える能力がないのです。日本人が国際会議に出て行くときとまるで発言ができない。日本の英語教育のせいだという。もっと会話ができるようにならなくちゃだめじゃないか、国際会議で発言できないのは学校の英語教育がいけないんだと言います。しかしこういう考えは間違っています。会話なんか必要じゃないのです。耳がよければ会話はできます。しゃべることができても相手が何を言っているかわからなければ、しゃべれません。国際会議などでも、初めから原稿を書いていって、これをしゃべろうとするから、会議が右へ行っているのに“私は今から左の方へ行きます”というようなことを、言っているわけです。耳でよく聞いて解する能力が日本人にはおしなべて欠けております。これは一朝一夕のことで改まらないでしょう。小さい時から勉強は本を読むこと、字を書くことだとたたくこまれているために、大人になっても大事なことは書いたり、証文にして一札入れることばかり考えております。ところがこのごろのように会議とか電話とか、そういうものが必要になってきますと、いちいち文書の交換などしていないで極めて大事なことが

決まります。

以上は大人の世界のことですが、幼稚園で一番欠けていると思うのは、子どもに大人の話をだまっておくという訓練をきびしくするという点だと思えます。イギリスでは“子どもは見られるべきものである、聞かれるべきものではない”(Children should be seen, and not heard)”と言います。これは“大人の前に出たら子どもは口をきいてはいけません。だまっていなさい”というきびしいしつけであります。大人がしゃべっている間、子どもはじっと聞いています。余計なことを言うと、“シッ”と親はすぐたしなめます。“人の話を聞く”これは民主主義の基本的なことであります。日本では、自分の言いたい放題を申しませんが、人の言うことはまるで聞こうとしない。子どもが大人の言うことに對していちいち口をはさむというようなことは、子どもの精神発達の上から言ってもよろしくない。もちろん子どもが自由に思う存分おしゃべりをし、いたずらをする時間も必要ですが、ここという時になって、五分や十分相手の言うことを充分注意して聞けないようなことでは、どんなに本を読んでも、どんなに教育してもだめなのです。耳の、聴覚的な理解、これを幼稚園が徹底してやっていたければ、それが教育の基本になると思えます。

今の小学校の授業は、四十分から四十五分が一時限です。その

間に本を読んだりする時間もありませんが、大体は、先生がしゃべっております。ところが幼稚園を出たばかりの子どもは、注意の集中のできる時間が五分位が限度です。したがって小学校へ入って先生の言われる言葉の大部分は、右の耳から入って左の耳へ抜けてしまいます。これで学校の勉強がよく理解できるはずがありません。注意の集中が、耳で聞いたことをどれだけ理解するかということによって、小学校の下級学年の学力の差はついてしまうといつてよろしい。そして、それは幼稚園の時の教育、訓練によることが大であります。

レトリックの勉強を

私は、これからの幼稚園で言葉による教育をするのなら、先生が面白い話をしなきゃだめだと思います。今みたいな（と、まるで見てきたようなことを言いますが）面白くない話し方では、子どもが注意を集中しようとしてもなかなかしにくい。子どもに興味を持たせるには、なるべく面白い話をしなければいけません。子どもがついひき込まれるような話ができるようになれば、これは言葉の教育者の最大の資格を獲得されたことになります。それにはレトリックというものがあります。訳しますと修辞学となります。同じことを言うのに、一二三四五とやったら全然面白くな

い話が、三五二一四とこういうふうに並べると面白いという場合があります。そのところの呼吸がレトリックであります。たとえば俳句の場合に「古池やかわずとび込む水の音」となれば立派な句ですが、「水の音かわずとび込む古池や」と変えては俳句でなくなりません。落語で言いますと、初めに「まくら」があつて、終りに「さげ」がある。このさげを最初に言いますと面白い落語ではなくなくなってしまふ。意味は変わりませんが、ただ順序が違ふ。それによって面白いものと、面白くないものができる。それを教えてくれるのがレトリックであります。日本には二度そのレトリックというのを輸入しようとしたことがあります。二度とも失敗しました。最初は空海が中国から持って来ましたが、『文鏡秘府論』というものであります。これがついに広まりました。二度目は、明治になってヨーロッパから持って来ました。美辞学とか、修辞学とかいう名前をつけて広めようとしたが、広まらない。なぜかという、耳から聞く言葉に対する関心が社会に低いかからです。

幼稚園の先生はいろいろお忙しいのに、さらにレトリックの勉強をお願いするのは大変気が引けるのでありますが、三つ子の魂を完成させるのに、最も大切なものの一つが、レトリックに対する関心を高めることであります。しかし十分な参考書もない現状

ではありませんが、いかにしたら面白い話ができるかということ
を、毎日努力されるだけで、すでにレトリックの勉強が始まって
いると言えるのであります。

うそも方便

皆さんはいま、へとへとになって子どもを教育していらっしや
ると思いますが、少し労力を使いすぎていると思います。なぜな
らば、先生方が少し真面目すぎるからです。どういう点かという
と、少し本当のことを言いきぎです。もう少し、方便としてのう
そをつかなければいけません。教育は一種の錯覚に基づくもので
あります。能力のない子どもに向かって「あなた能力がありません
んね」などということ言っでは子どもは育ちません。能力のな
い子にも「そのうちに能力が出てきますよ」とはげましてやりま
す。はげますというのは、一種の希望的観測であります。

戦争中にアメリカにスキナーという学者がおりました、鳩に時
計の針と同じようにグルッと一回りする訓練をしました。これは
すぐできました。どうするかというと、鳩が時計の針の方向に向いた
時にえさをサツとやる。反対側を向いた時にはやらない。すると
鳩は、えさをもらうにはこっちを向いた方がいいということがわ
かって、しばらくすると時計の針と同じようにグルッと回ること

ができたということ。鳩でもそうです。人間でも怒ったり叱
ったりしたのでは、教育はできません。ほめてやらせなければい
けません。人間は言葉でえさをやることができます。何かをした
時「あらいいわね」と言えば、そういうことをするのです。とこ
ろが実際はしばしば、逆のことをしています。ガラスを割る、先
生が怒る。またガラスを割る、また怒る。しかしだんだんあまり
怒らなくなる。と今度はもつとひどいことをする。なぜこういう
ことをするかと言いますと、先生から注目されたいという気持ち
を持っていたずらをしている。小学校の勉強ができない生徒は、
勉強の方で先生に注目されません。しかし、何とかして注目され
たい。そしてやがて悪いことをすると先生がとんできてくれると
いうことを発見する。非常に悲しい形ですが、これで先生を独占
することを子どもが知りますと、いたずらをする。

こんな子どもを直すのに、ただガラスを割らせないように苦心
してもだめです。ほめるにかぎります。ガラスを割ったのではほ
められません、方法がないわけではありません。二人だけにな
ってどこかへ行って、おいしいものをご馳走します。叱られるこ
とを忘れて、食べちゃおうということになります。叱られるこ
がってもらいたいという気持ちでやったことなのです。今こ
でこういうことになればガラスを割る必要はない、ということ

になります。そのあとちょっとよく勉強した時にほめてやる、すると、こういうふうにすればいいんだと子どもは思つて、また勉強するようになります。たまに反対の悪いことをやっても無視することです。

それからお母さんを敵に回さないことです。皆さん若い方が多いようです。ご自分のお子さんを育てたことのない方も多いと思ひます。そういう先生たちには、お母さん方が何となく不信感を持ちます。お母さんの信頼を得るには、何とか無理してでもそのお子さんをほめることです。ほめるには相手よりも一段と高い所に立たなければできないのですから、ほめることで相手のお母さんに差をつけることです。そしてお母さんに協力してもらえば、三つ子の魂を作るのは大変楽になります。

おわりに女の先生へ

もう一つ、幼稚園では大部分が女の先生です。男の子にとつては大変うつとらしいことです。女の子にとつても女の先生は、うつとらしい。女の先生の特技の中にえこひいきがあるということ。それに一べんだめだとにらまされると、執念深くいつまでも忘れてもらえないということです。最初ちょっとまずいことがあると、ずーっと尾を引く。男の先生だと無責任というか、カンカ

ンになって怒つても、翌日になるとケロリとして、いい子だなあ”などと言います。子どもにすれば雷は落ちるけれども、カラッとしている。女の先生は梅雨時みたいにぐじぐじしていて、いつまでたつても雨がさがりません。子どもは雷の方がいいという。皆さん方は梅雨時のうつとろしさをなるべく早く捨てて、さっぱりと、太陽の如くわけへだてなく、すべての物に光をあてていただきたいと思ひます。そうすればそこから、すばらしい芽が出て、すばらしい花が咲いて、実がなるようになります。ありましよう。そして実がなつた時に、われわれがこんなすばらしい実をつけたのは、そもそも何のおかげであつたかと、成人してからふり返つた時に、あそこに一人の太陽の如き先生がいらしたというようになれば、教育の中で最も大事なものはここにあつたんだ、と社会が期せずしていうようになるだらうと思ひます。そういう教育を皆さんは現にいま、やつていらつしやるのです。

冷たくなつた鉄をたたいておるわれわれのような教師から見ますと、まことに教師冥利につきる仕事をされているのであります。いろいろ苦しいこともおありと思ひますが、どうか次の時代を担う三つ子の魂を作っているのだということをお考えになつて、ご精進をお願いしたいと思います。(お茶の水女子大学)